奈落をかける流星

せっぷく

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これはアキちゃんがいつの間にかアキさんになり、何時の日か原生生物「シロフエ」になってピッケルと塩を手に夕飯と追いかけっこするようになるまでの物語である。▼本作は「メイドインアビス闇を目指した連星ディープインアビス」の再構成作品です。水分や体温、気候等々のオミットされたシステムのあるアビスに挑戦したくて書きました。目指せ解像度の高いアビス！▼上昇負荷、蒼笛昇格条件等々を原作設定と同じにする為、この作品には数か月で白笛になる夢幻卿は居ません

目次

奈落に続く1歩目 ―― 1
奈落に続く2歩目 ―― 26
奈落に続く3歩目 ―― 44

奈落に続く1歩目

その日、南ベオルスカの孤島にある唯一の街、オースは喜びで湧いていた。
街ですれ違う誰もが顔に笑顔を浮かべていた。その日は特別な日だった。探窟家の街オースの歴史に遺る大偉業が始まる日。
街の英雄である白笛が絶界行（ラストダイブ）を行う日だった。ソレは人間が帰ってこれる限界地点、深界5層より更に下、
海の底より更に深い遥か地の底にある最深部へと探窟に向かう探窟家達にとっては一等特別な儀式だ。
アビスと呼ばれる大穴が人々に見つかってから１９００年。誰一人として底を見て帰ってきた者は居ない。
大穴には人知を超えた化け物が跋扈し、途方もない価値を持つ遺物と未知が眠っている。数多もの人間が挑み、
その多くが喰われながらも残った者が解き明かせぬ未知を語り、消えていった者達以上の人々を熱狂させ、また大穴へ引きずり込んでいった。

ある者は未知への浪漫に胸を躍らせ、ある者は国同士のパワーバランスさえ揺るがせる事が出来る遺物を求め、

ある者は危険に満ち溢れた冒険によって得られる名誉を求めて大穴に潜っていく。

彼等は皆、探窟家と呼ばれる者達。自分の命よりも価値のあるものを求めて人食いの大穴に挑み続ける命知らず共の名称だ。

白笛とはその中でも数える程しか居ない探窟家の上澄みの中の上澄み、数々の冒険を成功させ生き残り続けてきた英雄。

その名前の通りの白い笛を首から下げて、先陣を切ってアビスの闇を照らし未知を既知へと塗りつぶしてきた偉大なるパスファインダー。

その白笛の絶界行（ラストダイブ）によってアビスの謎がまた一つ解き明かされる事を願い町中の誰もが祝杯を挙げていた。

老いも若きも、男も女も、皆が皆ただ一人の旅立ちを祝福し、その勇気を称賛する。

詩人は彼女の名誉と功績を謡いあげ、劇作家は彼女の歩んだ人生を物語として海の向こうからきた客人達の目と耳を楽しませていた。

少女もまた感動に目を輝かせ、口には三日月を思わせる笑みを浮かべ、興奮で握りしめた手からは血が静かに滴り落ちていた。

少女は持たざるものだ。自分を捨てたという親の顔は記憶になく、名前は顔も知らない親でもない誰かに孤児院に入れる為だけに付けられた。

少女の名前は「アキ」、名前の由来は空き家の捨て子、つまり「空白（アキ）」。故に彼女は自分には存在も名前にすら価値が無いと思っていた。

だからこそ、今のこの光景は彼女の心の奥底に突き刺さった。これがただの白笛であれば、少女も手の痛みすら感じていない程に熱狂などしていない。

今回絶界行（ラストダイブ）をする白笛は元孤児だった。それも今自分が所属している孤児院出身の探窟家。その元孤児が探窟家として昇りつめて、

彼女の絶界行（ラストダイブ）に誰もが歓声を挙げている。そこには少女の無自覚に求めていた全てがあった。

溢れんばかりの称賛、祝福、名誉。そして忘れられる事のない伝説として名を遺す、少女が思い描く限り最高の存在証明。

あぁ、偉大なるかな殲滅卿。アキは今まで殆ど意識すらしてこなかったライザという名前らしい大先輩の事が大好きになった。

彼女のお陰で、アキはこの地に根付く憧れという名前の呪い、自分の胸の中にもあったその色と形をハッキリと自覚できた。

興奮に浮かされてようやく、アキはそれまで共感出来なかった感情を魂で理解した。

「それぐらい賭けなきゃ、憧れに指すら届かない」

あれから2年、今日は赤笛を貰って、アビスで初めての探窟を行う記念すべき日だ。アビスの土を踏み、一歩踏み出すだけでも心が躍る。

ついに見ていただけの世界だったものが、手に届く世界へと今変わったのだ。

今、アキが立っているのは深界1層の「星見の丘」。深度１００Ｍまで続くアビスの入り口、別名「奈落門」とも呼ばれる場所。

位置によっては直系1キロの丸い大穴が一望できる開けた場所で、植生は豊か。

原生生物の種類も数多いが縄張りに入らなければ大人しい類が大半を占めている。

天気は雲一つない快晴、日差しが眩しく肌を焼く暑さを感じるものの、大穴から吹き抜ける風が暑さを中和してくれる。

空にはツチバシが飛び交い、遠くからその鳴き声が耳に届く。少し下った場所にある広く背の高い草の群生地には、

ヒトジャラシの群れがいるのだろうか、草に混じってピンと高く伸びた尻尾が草をかき分けて動き回っていた。
遠くから見るだけだったものが今目の前に広がっている事に思わずアキの頬が緩む。
「アキ？　アキー？　ちょっとぉ！　ぼぉっと突っ立ってないで早く行きましょ！」
「あぁ、ゴメンねドロテア。初めての探窟って考えると、色々感慨深くなっちゃって……」

声をかけられてアキの半ば飛んでいた意識が浮上する。気が付けば桃色の眼と髪をおさげに纏めた女の子、ドロテアが少し呆れた顔をして立っていた。
アキはそんな彼女に対してへにゃりと笑みを浮かべながら探窟帽ごしに後ろ頭をかいた。
ドロテアの隣では茶と緑の目のオッドアイが印象的な金髪の少年が心配そうにアキの様子を伺っている。
「大丈夫……？　アビスでは次の瞬間何が起こるか解らないって言うし、あんまりぼうっとしない方が……」

「大丈夫大丈夫、もう意識は切り替えたから。ティアレだって私の勘の良さは知ってるでしょ？」
「キミのは勘が良いの一言で済ませて良いのか、ボクには解んないんだけどね……」

ティアレがため息を吐きながら目を瞑る。大丈夫とでもいうように片目を瞑って笑みを浮かべているアキは信じられない程に勘が良い。
何となく、そう思ったからという理由で行動した時の彼女が失敗した姿をティアレは見た事がないぐらいだ。
化け物染みた勘の良さに対しては未だに慣れないし、多分慣れる事はないんだろうなぁと思いながらティアレは笑うアキをジト目で見つめた。
赤眼赤髪、うなじまで届くか届かないかの長さの髪を後ろに紐で一纏めにした女の子。
中性的とでも言うのだろうか、かなり顔の整った男子にも見間違われる顔立ちだが、髪型と目元の泣き黒子で辛うじて判別が効く。
断れない性格なのか色々な人から頼まれ事をされる子で、ティアレ自身もアキには色々と世話になっていた。

「あたしたち同期４人の中で誰が一番すごい成果が出せるか競争しましょ！」
「じゃあ、勝った奴が他の３人から、好きなオカズを一品貰えるって事にしようぜ！」

アキとティアレが話し込んでいると何がどう話が進んだのか、ドロテアはこの場に居る４人の最後の一人である少年、

短く切った黒髪に吊り上がった太い眉が特徴的なラウルと賭け事を始めていた。

ドロテアが勝負事が大好きでラウルが負けず嫌いで直情的であるのを考えれば、放っておけばこうなるのは必然だったかもしれない。

「いいわよ！　あたしは絶対負けないから！　憧れのライザ大先輩みたいな、すっごい探窟家になるんだもん！」
「またそれかよ……、同じ孤児院出身の白笛でスゲーとは思うけど、オレ達話した事すらねーじゃん！　ほんと殲滅卿の事好きだよなぁ……、
　他にもそういう奴は居るけどよー。ま、いーや！　それじゃ、みんな！　さっさと採掘に向かおうぜ！」

ラウルが意味ありげな視線を向けてきたのを察してアキはエヘンと胸を張る。ドロ

テアとアキは良く二人で殲滅卿の話で盛り上がっていて、
その話に嬉々として巻き込もうとしてくるのは男子二人にとっては良くある事だった。
違いがあるのは、ラウルはさっさと逃げて、ティアレは常に巻き込まれているという点だろう。
お陰でティアレは良い事か悪い事かは別として、重度の殲滅卿オタク達の話に付いていけるまで知識量が備わってしまった。
年齢が同じな彼らが集まって何かするとき、率先して場を引っ張っていくのは大方ラウルかドロテアの何方かだ。
ティアレは自分から前に出る性格ではなく、アキも見守る側に立つ事が多い。二人とも巻き込まれればちょっとした苦言は漏らすものの、
明るく好奇心と元気の塊のような彼等がやる事に付き合うのを楽しんでいる部分は確かにあった。
そのまま4人で談笑を交わしながら星見の丘を下っていく。此処はまだアビスの中でも安全圏と教えられている。耳をすませば風、それに靡く草、
擦れる葉の音に鳥と虫の声に混じって、遠くからオースの街の工房が稼働している音とピッケルが岩を叩く音が聞こえてくる程度には街に近い場所だ。

人間の生存圏に近い場所でもある此処は安全な環境を保つ為に、探窟家組合も依頼という形で少しばかり手を加えている。

談笑しながら周囲の光景や環境を目と耳で楽しんでいたアキは耳慣れない、何か楽器のような音が一瞬混じった気がして訝し気に顔を顰めた。

どうしても気になったアキは手で皆に対して合図を出して口の前に人差し指を立てる。

和やかな談笑がピタリと止まり、他の3人は何事かと警戒した目でアキを見ながらそれぞれピッケルやナタ、弓に手をかけた。

時間にして数十秒程の沈黙が流れる、その間に納得した者、違和感を感じた者、訝し気なままの者と反応が分かれていく。

「聞こえた？」

「うん、なんとか。よく気付いたね？」

「……あ、わかった！　音ね！　偶に変な音が聞こえるわ！　方向は……あっち？」

「音ぉ？　ぜんぜんわっかんねー……見に行ってみっか。ドロテア、先導頼むぜ」

ドロテアを先頭に静かに小走りで音が聞こえてきたと思われる方角へと近づいてい

く。近づくにつれて奇妙な音は大きくなり、下から聞こえてくるものだと４人は理解した。

近づくうちに丘の斜面が途切れて、その先は崖になっていた。崖下とはかなりの高低差があり、手持ちのロープでは下まで届かない事は明らかだ。

崖下を見回して音の発生源を捜しているうちにラウルが音の原因と思わしき生物を発見した。

「あいつは……かなりヤベー原生生物だ。たしか……『ツノナキ』とか言ったはずだ」

「大変じゃない！　なんでこんな浅い所にあんなのが居るのよ！」

「ここよりもっと深い所に居るって話だったよね？　２００Ｍ辺りからだったと思うけど……」

「うん、私もそこ辺りからだって聞いた。でも向こう側からこっちには来れそうにないから安心……？」

崖下から少し離れた場所にツノナキが群れで居た。ティアレの言う通り、普通は２００Ｍ辺りで姿を見かける原生生物であり、

５０Ｍもない場所で見かける事は珍しい。４人は孤児院の授業で深い場所にいる原

生生物は餌を探して上がってくる事があるのも聞いたことがあるが、
1層で上がってこなければならない程に餌が無くなるという事は無いとも聞いていた。

「これは、アレだ！　下にもっとヤベー原生生物が出て逃げてきたとかじゃねーの？」
「アキ、昨日の天気は雨だったよね」
「ん？　そうそう、雨であ……あ～、タチカナタの縄張り移動？」
「そういえば雨の日に水場から水場に移動するって聞いたことがあるわね、でも成体の数って少ないって話だけど？」
「ま、今日はそれほど深く潜るつもりもねーし、少しは気を付ける程度でいいだろ。見かけたらすぐ発煙筒焚いて逃げるって事で！」

賛成と声が揃う。探窟家は原生生物と戦う仕事ではない。時として戦わなければならない時はあるが、好き好んで戦う訳ではない。
目に付いた原生生物を片っ端からピッケルやナタを振り上げて突撃していく者は探窟家とは言わないのだ。
もしそれを行う者が抜きんでた実力を持っていない限り、言われる事は一つ。つま

り、「鈴付きからやり直せ」だ。
それに今の４人はヒヨコが散歩しているようなものであり、ツチバシが一匹突撃してきただけでも全滅しかねないか弱い生き物でしかない。
孤児院では安全を期して必ず赤笛の探窟者には獣除け、鳥除け、虫除けのいずれにも使える発煙筒を常備させている。

「あたしたちに許可されてるのは１００Ｍまでだけど、初めてだしその半分ぐらいでいいんじゃない」
「そーすっか、勝負にゃ負けねーからな！」
「オカズなんて欲しくないんだけどなぁ……」
「ティアレ、それは負ける気が更々ない人の台詞じゃない？」
「もちろんそれはそれ、これはこれだよ。あ、草むらと木陰には気を付けようね、何が出るかわからないから」

一行はツノナキの観察を切り上げて改めて探窟場所を探して歩き始める。今日は初めての探窟というのもあって、
４人セットで星見の丘まで（深度１００Ｍ）なら何処にでも言っていいと言われてい

る。
　其処までであれば、妙な所に行かない限り滑落の危険も原生生物の危険も殆ど無いと判断されているからだ。

「……キラキラしたお宝の気配を感じる。今日は此処を探窟ポイントにしよう」
「またアキが変な事言い出した……皆どうする？」
「お宝って、広いけど木と茂みに岩壁ぐらいしかないじゃない」
「まー、空からは襲われ無さそうだな。別にここでもいんじゃね？」

　暫く歩き、ロープを降ろして崖を下りを繰り返した所でアキが突拍子もない事を言い始めたのに対して全員の足が止めて肩を竦める。
　ティアレの見た所、ある程度の広さがありヒトジャラシ等の小動物がいる事から、ゴコウゲの巣にはなっていない。
　ただドロテアの言う通り、木と茂みと岩壁しか見当たらないが空からの視界も途切れる事から時間をかけて探窟する分には悪くない立地ではあった。

「で、実際のとこはどうなの？」

「探窟するにしても休憩するにしても丁度良いかなって。それに此処から先は崖を登るか、降りるかしないと進めないじゃない？」
「確かに崖をロープも無しで登るのは手間だね」

そう言ってチラリと確認した深度計は４８Ｍを指していた、これ以上降りると当初予定していた５０Ｍを大きく超える事になる。
そうなると降りる選択肢も無くなる為、此処で探窟を行うのは判断としては妥当で理に適ってもいた。成程とティアレは大きく首肯して納得する。
そんなティアレを後目に、アキは作業用手袋を改めてギュッとはめ直して探窟作業の準備を進めていく。背負っていた大きなバッグを木陰に置いて、
ズボンの背中側に緊急時用の発煙筒を突きさす。少し不格好でお尻の骨に硬い筒が当たって動きにくくなるが、身の安全を考えれば贅沢は言っていられない。
アキは最後にバッグの横に固定していた大振りのピッケルを取り外して肩に担いだ。奥を見ればドロテアとラウルもバッグを木の下に置いて各自準備を進めている。

「それじゃおっ先～」
「茂みには気を付けなよー、あんまり離れないようにねー」

やっとバッグを降ろしはじめたティアレにアキは軽く手を振って岩壁に向かって進む。見た所、何の変哲もないただの岩壁しかない。

授業ではこういう場所はピッケルで叩いて音が違う所を捜すか、岩の切れ目、もしくは明らかに人工物である石の板があればひっくり返せと教えられてきた。

その知識を元に現在地を改めて見回してみれば……奥はどうか解らないが、この近辺には岩の切れ目はなく石の板も無い。

となるとやる事は一通り周辺を見て回るか、地道に探るかの何方かしかない。

少しの間、選択を天秤にかけて地道に探る事を選ぶ。一人で奥に行って安全を確保しながら見て回れるかと言われればアキにイエスと答えられる自信はなかったからだ。

ラウルなら奥に行く事を選ぶのだろう、探窟家としては慎重すぎたか？　と苦笑いを浮かべつつ岩壁に耳を当て、コツコツとピッケルで叩いていく。少し移動しては叩き、更に少し移動しては叩く。

「んー、ここがちょっと音が違った？　……ん、違うね。せぇっの!!!」

繰り返す事数百回、違和感を感じた場所で立ち止まり再度今度は強めに周囲と叩き比

べをして音の違いを確かめる。
そして確信を得たアキは全力でピッケルを岩壁に向けて振り抜いた。２度、３度、４度とピッケルを叩きつけ岩を抉る。
何か見つけたのかと奥から３人が集まってやってきた気配を背中越しに感じる。
９、１０、１１。明らかに音が変わってきた事に後ろから小さく歓声が上がった。

「おぉ……、手が、手が凄い痺れる……」

一度一度全力で振り抜いた反動が直に伝わって手どころか腕全体が痺れてきた。
他の探窟家も毎回これをやっていると考えれば、改めて彼等に対して尊敬の念が湧いた。
ピッケルが大振りなのも相まって、どうしても息も上がってしまう。身体能力も体重もまだまだ足りなさすぎると実感する。

「ふーっ、疲れた……ちょっと休憩」
「凄いじゃないアキ！　ほんとに何かありそうな所あったじゃないの！」
「おあああ！　あっつい!!」

アキはキャー！　と後ろから飛びついてきたドロテアを力づくで引きはがして、服の襟で髪から頬に伝っていた汗を拭う。

後ろを振り向けば男二人が感心した顔で此方を見ていたので、上着をパタつかせて体に風を送りながら満面の笑みでブイ！　とピースを突き付けた。

間違いなく今日の勝負には勝った！　アキには確信があった。しかしその確信も彼らの足元にある物体を見て一瞬で崩れていった。

「……ところで、それなに？」

「見てわからない？　遺物だよ」

「……え？　うそ、もう見つけたの???　早くない??」

「いやー、アキがキラキラしてる！　とか言い出した場所だけはあるよね。

有ると思って探したら、茂みに隠れてた石の板の下だとか、木の根の穴とかに隠されてた」

「言っとくと見つけた数はオレが1個」

「あたしも1個！」

「ボクが3個、でアキが0個」

「私が最下位!?　うそぉ!!?」

現実は残酷だとアキは嘆いた。確かに只管石壁を叩き続ける事に集中して他の事にはあまり気を配っていなかったが、

まさかもう見つけていたとは思いもしていなかった。ただ、コレに関してはアキの感覚がズレている。

集中していたアキの思っているより時間の経過は早かった。既に時刻は昼食を食べても良い頃合いになっている。

３人が近寄ってきたのは音に誘われたのではなく、休憩に誘いに来たのとアキが岩壁を掘り始めたタイミングが丁度かち合っただけでしかなかった。

「ま、続きは昼飯食ってからでいいだろ?」

「中に空洞があるのは確かだしねぇ、逆に昼以降はボク等が張り切らないといけないぐらいだよ」

「お手柄よお手柄!　何が見つかるか今から楽しみね!　あ、それはそれとしてアキ、塩貸してくれない?　持ってきてるのは知ってるわよ」

「へ……?　あ、うん。良いけど……。何だい、その目は?　携帯食の味変の為に一瓶

持ってきただけだよ?」

言い訳を重ねるアキに何も言わずティアレは無言で肩を竦めた。日帰り探索で調味料は普通持ち込まない。

ただ、アキなら持ってきているだろうという強い信頼があった。これは言うなれば、知ってたというやつだ。

「で、塩で何をする気なのさ?」

「茂みとか草むらで見つけたコレを捌いて塩焼きにするの！　ちょうど４匹見つけたのよ、凄いでしょ！」

そう言ってドロテアは少し離れた場所に設置された鍋に手を突っ込んで、中からワシャワシャと動くタチカナタの幼生を取り出した。

どうやら昨日の雨で別の水場に移動しきれなかった個体が隠れていたのを見つけたらしい。

暇な事をと一瞬頭に過り、３人が探していたと言っていた場所を思い出し草や茂みをかき分けているなら見つける事もあるかと考え直す

それよりもアキが気になったのは……

「鍋、持ってきてたんだ……」

「固形燃料もあるわよ？　ラウルが料理下手な癖に持ち込んでたの！　原生生物を狩って肉を食べたかったんですって」

「それを言うなっての。別にいいだろ、そのおかげで新鮮な肉が喰えるんだぜ？」

ラウルが顔を赤くしてそっぽを向く。そういえば移動中、やたらと周囲を警戒してる素振りを見せていたなと思い出した。

あの時アキは真面目に警戒してるなと思っていたのだが、実際はそういう事だったのかと納得する。実にラウルらしい動機だった。

「私はちょっと休憩させてもらうよ。だいぶ喉乾いちゃった」

アキは上着と探窟帽を脱いで纏めてバッグの隣に投げ捨てる。何時の間にやら汗だくで全身が気持ち悪い。

気持ち悪さを誤魔化そうとバッグから取り出した水筒で頭から水を被る、非常に贅沢

な水の使い方だった。
そのまま一本空にして頭を振って水気を飛ばす。頭と体に溜まっていた熱気が逃げて少しはスッキリする。
長く息を吐きながら、もう一本水筒を取り出して温い水を喉に流し込んだ。

「は～～～、染みる……」

アキは木に背中と頭を預けて力を抜く。背中側に突っ込んでいた発煙筒がズボンから抜けてカランと音を立てて転がり、
丸めてひと固まりにした上着と探窟帽の塊に当たって止まる。アキはそのままぼんやりと帰りまでの水の消費について考えを巡らせる。
持ち込んだ水筒は4本、残りは3。あとは昼食で一本、昼からの作業で一本、帰りに一本と考えれば十分持つだろう。
帰りに途中に流れていた川から水を汲んでも良い。1層に関してはあちこちにそのままでも飲用可能な水が多い事を考えれば、
持ち込む本数を減らしても良いかもしれない。

「アキ、塩を借りに来たよ」
「そうだった……、はいこれ」
「ありがと。……かなり疲れてそうだね、できるまでそのまま休んでおけば？」
「いいの？　喜んでさぼっちゃうよ？」
「どうせそんなに時間はかからない。それに料理はドロテアに任せた方が美味しく出来上がるからね」
「酷いなぁ……なら見張りは任せた」
「大丈夫、ちゃんと見てるよ」

アキはゆっくりと目を閉じた。受け取った塩を届けにいっただろうティアレの足音が離れていく。
疲れてはいるが眠気自体は無い。そもそも寝入るだけの時間の余裕も無いから丁度いいかもしれない。
離れた場所で何か話している声が聞こえて、さっきと同じ足音が一つ此方に戻ってきて自分の目の前で止まった。
僅かに衣擦れの音がしたと思えば、上半身に薄い布が被せられた。目を開ければ、ティアレの上着が被せられている。

「あついんだけど……」
「見張りする以上コレをほっとくのは拙いから……
キミのシャツびしょ濡れで張り付いてるから目のやり場に困るんだよね」
「……色々言いたい事はあるけど、コレだけ言っとくあ・り・が・と・う」
「どういたしまして」
「このまま話し相手になってくれない？　どうせもうすぐでしょ」
「みたいだね」
「じゃあ、そういう事で」

彼方ではもう下拵えを終えたのか鍋で肉を焼き始めた音が聞こえてきていた。きっともうすぐ呼ばれるに違いない。
邪魔者が臭いに釣られて寄ってくるのを嫌ったんだろう、風に乗って漂ってくる香りには獣除けに使われているものと同じ臭いが混じっている。
ティアレに聞けば、ドロテアが野草に関しての知識が深くさっきの探窟の時間に見つけたもので、即席の獣除けを作っていたらしい。
ラウルも木に成っていたヘグイの実を食事の後のデザート用として幾つか収穫して

いる。

「探窟だけに集中してたのはボクとアキの二人だけって事だね」
「もうちょっと視野を広げないといけないかな？」
「周りが目に入らない程集中するのはどうかと思うよ？」
「アッハッハ、だよねー？」
「二人ともー！　そろそろ焼けるから集合―!!」

アキが笑って誤魔化そうとしていたら、ドロテアが大声で二人を呼ぶ。どうやら焼きあがったようだ、

鍋の前では既にラウルが自前の鉢を持って行儀よく座っていた。余程楽しみにしていたのがあまりにも解り易くて

思わずティアレと顔を見合わせて笑ってしまう。

「思ってたより早かったね？」
「そうだね、あぁそろそろ上着返して？」
「はいはい、それじゃ行こっか」

上半身に被せられていたティアレの上着を手渡した後、隣に乱雑に転がっていた探窟帽と上着を指に引っ掛けながら立ち上がる。

焼けた肉の良い臭いに口の中に唾液が溢れ、腹の虫も大きく鳴った。

初めての探窟で美味しいものが食べられるとは全く思っていなかったのもあって心が弾む、浮かれていると言っても良い。

気が逸るに任せてアキはティアレの手を取ってドロテア達が居る場所まで駆け寄っていった。

奈落に続く2歩目

焼きたてのタチカナタに塩分の効いたオニギリ二つ、デザートに果物一つという贅沢な内容。

ただアビスの探窟で初めて食べる食事の方が孤児院で何時も食べている食事よりかは豪華だった。

孤児院の食事は何時も食べてる芋だし、野菜は出ても肉が出る日は稀だし、デザートは望むべくもない。

そこまで考えてアキははたと気付いた。もしかしたら探窟で良いもの食べてるから先輩方の体の肉付きが良いのかもしれないと、少なくともアキの体は薄っぺらだった。肉に厚みが付く程は食べれていない。

普段の配達依頼等で貯めていたお金を切り崩してでも何か食べるべきかとまで考えると頭が痛くなるような気さえする。ともあれ、今は関係の無い話で帰ってから考えるべき事だ。今やるべき事は目の前の作業に集中する事、

つまり……目の前の小さい穴は開けたものの壁が崩れる様子は一切ない忌々しい岩壁に大穴を開ける事だった。

「あー、もう！　いい加減崩れてくれないかなぁ!!」
「交代しようか？　まだまだかかりそうだし……体力も回復しきってないでしょ？」
「喜んで手伝うわよ！　私も掘ってみたいわ!!」
「えー、勝負どうすんだよ？」
「放置して帰る事になったらそれこそ探窟家として失格だよ、あとそうなったらアキが拗ねる」

アキは更に力を籠めて最後に５～６回乱暴に叩きつけてからピッケルを杖代わりにして肩で大きく息を吐く。一人でやりきりたくはあった。が、このままだとその前に体力が尽きるのが先なのは嫌でも理解できた。

「交代お願い、あと拗ねないから!!」
「私が代わるわ!!　１人２０回ね！」
「先は長そうだねぇ」

「1～2時間はかかりそうだな」

　離れたアキに代わって目を輝かせたドロテアがピッケルを振るう。今はへそ辺りの高さに開けた穴を少しずつ広げている最中だ。そこから足元まで掘り抜いて這ってでも入れるぐらいの大きさにまで広げるの目標としている。

「意外と壁が分厚かったね」
「でも穴から見えた洞窟には期待できそうだよね」
「色々転がってたよな、何かは良く解んねーけど」

　小さい穴を石灯で照らしながら覗いて見えたのは、大体天井まで高さは自分たちの身長の2倍、奥行きはざっと5～6Ｍ横幅は3Ｍ程度小さい空間だった。中には箱や何かしらの物が転がっているのは確認できたが、石灯で照らして確認できたのはそれくらいだ。

「こうたーい！　２０回だけでも結構疲れるものね」
「んじゃ、次はオレが行くか」

「いってらっしゃい。このまま休憩挟みつつ回していこう」
「頑張れー。帰ったらしばらくは体力と筋力作りに励もうかな……」

入れ替わり立ち替わりピッケルを振るって穴を少しずつ大きくしていく。予定していた大きさまで穴の拡張が終わるまでには、それから1時間と少しが経過していた。

「皆お疲れ様、やっと掘り抜いたね」
「お前だけ異様に元気なのおかしくねぇ？　オレめっちゃ疲れてんだけど……」
「あたしたちの中で飛びぬけて身体能力高いだけはあるわね……」

拡張作業の最後の方は大体ティアレ、時々ラウル、もしくはアキ、稀にドロテアという具合になっていた。力もそうだが、ティアレの回復が凄まじく早かった。少し休憩をすれば元気になって戻ってくる姿はスタミナが無尽蔵なのかと思わせる程だ。

「それじゃ、埃まみれになってくるよ……」

鼻と口を布で覆った簡易なマスクを付けてアキは地面に四つん這いになって穴の中

に潜っていった。中を探ってくるのは発見者であるアキに委ねられている。何人も入って作業出来る場所でもない以上、一人だけで行くしかない。中の洞窟は小さな火だねを投げこんで消えない事は確認済みだ。

　二人は体力が尽きてへたり込んでいるし、ティアレは中でアキが何かあった時の為に腰に括りつけたロープの先を持っている。ロープが動かなくなったら定期的に引っ張って、合図が返ってこなかったらアキを引きずり出す役目を担っていた。

「よっこいしょっと……んー、これは、拠点……かな？」

　アキは洞窟の中で立ち上がって、探窟帽に搭載された石灯を点灯する、か細く小さな光が範囲は小さいものの暗闇の先にあるものを照らしだす。壁や地面を照らして周囲を確認していく中で気になったのは地面に転がっていた品々。これらは何度か配達依頼で行った探窟用具店で見た事があるものだった。

「……となると崖崩れとかで誰かの拠点が埋まったって事？　うぇ～、ヤダなぁ、死体とか見たくないんだけど……中も崩れ、うわ」

洞窟の中も一部崩れた後があり、崩れた跡を追って天井から下へと明かりを動かすと土砂の下から乾ききった手だけが生えていた。思わずさっと視線を逸らしてしまう、石灯の光も視線と共に移動して見たくないものを暗闇に消し去った。

「あんまり居たくないなぁ……。ささっと漁って帰ろ」

手があった場所を背後に小さな光を頼りに床に置かれていた箱や無造作に転がっている探窟用品にボロボロに劣化したバッグ等を入り口近くに纏めていく、同じ空間に居たくなかったのですぐにでも離れたかった。その間に一度外から腰のロープが引っ張られたので、安否確認を兼ねて荷物を受け取る準備をするように伝えた。

「今から荷物を送るから引っ張り出すの手伝って―!!」

「いいよー! そっちから押し出してー! こっちで受け取るからー!」

荷物を纏め終えたアキは入り口の穴に向かって中腰になって外へと叫ぶ、別に叫ぶ程の距離でもないがなんとなくそうしてしまった。外で待機していたティアレも声を張り上げての返答だった。洞窟の中で声が響いてとてもうるさいがそれに対して安心感

すら感じる。
　入り口前に纏めてあった荷物をアキはせっせと足で外に押し出して受け渡しをしていく。洞窟から出てくる荷物の種類からどういう類の洞窟だったか悟ったのか外から困惑の声があがっていた。目ぼしい荷物を外に運び出した後、アキは一度だけ洞窟の奥へと振り向いて一礼だけして自身も外へと這い出していく。誰かも解らない探窟家を掘り出すつもりは無かった、好んで触りたくも近寄りたいものでもない。

「ただいまー。あー、うん。まぁ……そういう事」
「中には、その……居たのかい？」
「途中から崩れてて、あったのは乾ききった腕、だけ。掘り出しには、行きたく、ない。かな、怖い……」

　穴から這い出た先には若干沈んだ雰囲気を放つ3人が待っていて、アキは中に何があったのかを3人に手短に話した。長く聞きたい話でも話していたい内容でもない。
「とりあえず中にあって使えそうなのはそこにある分だけ、箱とバッグの中身は見てない。もうちょっと奥に立ち入ったらまだ何かあるかもしれないけど、うん。近寄りたく

ない」

アキは洞窟内部で腕に対して徹底的に見ない、近寄らない、触らないように行動していて、洞窟の奥側を光で照らす事すらやっていない。呼吸すら浅くしていた程だった。

「解った。アキ、お疲れ様。ボク等は組合に報告するだけにしておこう。それで良いよね？」

無言で全員が静かに頷いた。誰も何が起きるか解らない事に対して手を突っ込むような真似はしたくなかったのだ。

「それじゃ暗い話はこれで終わり！　中に何が入ってるか確かめましょう！」

「そうだな！　アキが集めてきた探窟用具もまだ使えるか試さなきゃなんねーし！」

明らかに空元気だとわかるものだったが、今はそれがありがたかった。暗い雰囲気を払拭するには十分すぎるものだ。少しは緩んだ空気の中で４人は箱を開き、バッグの中身を出して地面に並べていく。

「この単眼鏡まだ使えるね。しかも倍率変えれる高いやつ」
「錆びついてるけど、ピッケルはボクらの使ってるのより質が良いのだ。これを使ってるのは蒼笛が多いって話だけど」
「じゃあ、中に埋まってるのは蒼笛って事？　あぁ、遺物は全部で６個あったみたい。箱に４つ、バッグに２つ入ってたわ」
「蒼笛がなんでこんな浅い所に拠点作ってんだよ？　あとこっちにあるのはダメだ。全部使いものになんねー」
「突然の大雨！　とか？」

何があったにしてもここに埋まってる探窟家はとんでもなく運が悪かったに違いない。拠点にした洞窟の入り口が崖崩れか何かで塞がってしまったのだから。寝ていたかは解らないが土砂で潰されていたのもそうだ、生きていれば何とか穴を明けて出てこれた可能性はあったのだから。バッグにピッケルがそのまま入っていたという事はそういう行動すらとれなかったのだろう。

「遺物の取り分はアキが３、ボク等がそれぞれ１で良いかな？」

「良いよ。手伝ってくれなかったらまだ掘ってる所だっただろうし。探窟用具に関しては……」
「要らない」
「要らないわ」
「ぜってー要らねぇ。不吉だから使いたくねぇ」
「じ、じゃあ、私が貰っとくね。わ、わー。この長い単眼鏡欲しかったんだー」

発見した物品の各自の取り分に関して遺物に関しては何の反対意見も出る事はなく通った。アキが探窟用具に関して触れようとすると食い気味に必要ないと3人の声を揃った。アキも正直それに賛同したかったが、それよりほんの少しだけ物欲が勝った。結果、とても渋い顔をしながら感情の全く乗っていない平たい声しか口から出てこなかったが、誰もそれを指摘する事は無かった。

「うん、それじゃ、まぁ……全部終わった事だし、そろそろ帰らない？」
「あれ？　もうそんな時間？」
「まだ少しぐらいは時間の余裕はあるわ。でも体力的には、自信ないわね」
「勝負にゃ負けちまうけど、これ以上何かしようって気力も沸いてこねーな。疲れた」

　ドロテアとラウルは精神的にも肉体的にも疲れたのかゲッソリとしている。あれほど苦労して掘り出したのが他の探窟家が死んだ場所だったともなれば喜びも余り湧かないのだろう。アキとティアレも同様に、このような遺物の見つけ方をして喜べる精神性はしていない。

「多数決で帰還に決定！　私はさっさと帰ってシャワーを浴びたい!!」
「あー、あたしもそれにさんせー。スッキリしたいわ……」
「その前に遺物鑑定所と組合に顔を出す必要があるけどね」
「めんどくせーよなぁ、帰り何か買い食いでもしねぇ？」

　アキは多少強引に話を纏めて帰り支度を始める。ティアレにはまだまだ余裕はありそうだったが、自分以外のメンバー全員がこの様子ではと諦めたのか苦笑を漏らしているものの反対意見は出さなかった。元気の無かった二人も帰るとなって気力が湧いたのか先ほどより顔色が多少は良くなっていた。

「確か来た道に綺麗な川があった筈だけど、ここからどれくらいだっけ？」

「２０Ｍは上で１キロも離れて無かったんじゃないかなぁ」
「なら３０分もかからないかな？　水がそろそろ尽きちゃいそうでさ」
「ボクのでも飲む？　一本分なら分けてもいいよ。まだ別の水筒に半分残ってるから」
「あ、ズリィ。オレにもくれ」
「はーい、あたしもあたしも!!」

ティアレは水がたっぷり入っている水筒の中身が空になって返ってくるであろう事を確信した。ちらりとアキを見るとこうなるとは思ってもみなかったのだろう、両手を合わせてゴメンとジェスチャーを送っている。アキとしては多少移動すれば水分補給が出来ると元気付けようとしたのが裏目に出た形だった。

「仕方ないなぁ……わ」

突然、何の前兆も無く腹にまで響く重い音と共に一瞬地面が揺れる。それと同時に自分たちが掘り抜いた穴から土埃が中で爆発が起きたかのように噴き出した。何が起こったのかと４人は呆然と顔を見合わせて、何拍か置いてやっと理解が追い付いた。原因が何であれさっきまでアキが入っていた洞窟が落盤して埋まったのだ。

「移動しよう、今、すぐに」

反対意見はでなかった。

川に到着するまで全員誰も何も言わなかった。重苦しい重圧感に背中を押されるように足早にその場から離れる事を選んだ。後ろから何も音が聞こえてこなくても、あの出来事は４人の心胆を寒からしめるには十分すぎた。川でゆっくりと水分補給をして、休憩をとってようやく話せるだけの余裕が戻ってきた。

「さっきのは危なかったね。まだ胸がドキドキしてる」
「アキがもうちょっと時間かけてたら死んでたかもしれないね」
「アビスって怖いのね……」
「いや、こんなの今回が特例だろ……毎度あったら体がもたねーって」
「組合への報告、どうしよっか？」

「もう別にいーだろ？　全部埋まっちまったんだし」

荷物からも何処の誰かを特定できるような物が見つからなかった。探窟用具が使いものにならない程劣化していたのを考慮すれば、報告した所で今更な話でもあるかもしれない。

「あたしに良い考えがあるわ！」
「うぉあ!?　いきなり後ろから叫ぶなっての」
「どしたのドロテア？　トコシエコウなんて掲げてさ」
「あぁ、此処まで戻る時に何本か摘んでたね」
「お葬式をしましょう!!　幽霊とかそういうのが怖いんじゃないわよ、そうした方がスッキリするからやるの！」

ドロテアの強い主張を受けて三人は顔を見合わせて、肩を竦めるなり眉を上げるなりするだけで意思疎通を済ませた。まぁ、怖いんだろうなというのが3人の抱いた感想だ。大分前にアビスで死んでいる以上、死んでいた当人は既に奈落に還っている。なので改めてやる意味合いは余り無いのだが、スッキリするからやりたいと言われると特に

手間も余りかからない以上、特に否定する理由も見当たらない。ドロテアの顔を立てたような顔をしているが、単に3人にも歯切れの悪い気持ち悪さが背中にべっとりと張り付いていたから賛成しただけであった。

４人でちょっとした穴を二つ掘って、そこに錆びたピッケルのシャフトの先とピックの先端を埋めて自立させる。立てたピッケルの前でトコシエコウを燻して香を焚いて、その花びらを周りに散らし簡易に作った墓の前で手を合わせて冥福を祈る。誰とも解らない探窟家の小さな葬式はこれで終わり、名前が解らない以上札を作って大穴に投げいれるまではしなかった。

「ここまでやれば大丈夫でしょ！」

「もー帰ろうぜー、腹減ってきちまったよ……」

「あと1キロは歩くから街までまだかかるよ、頑張ろう！」

「大穴の円周をぐるっと回る感じで降りてたからね。大体半周ぐらいはしてたんじゃないかなぁ？」

初回という事もあって降りる深度を非常に浅めに、星見の丘を散歩気分で歩き回りながら非常に降りやすい所から降りるを繰り返していた為、４人は上昇負荷による負担を

殆ど感じていない。1層においての上昇負荷による体の負担は軽度の吐き気と眩暈、その程度であればほんの少しの時間経過で症状は治まる。1層で吐く事があるとすれば症状が治まる前に無視してガンガン登るか、地形上の問題で短時間に昇り降りを繰り返さなければならない場所から戻ってこなければならない時ぐらいのものだろう。

「はやく帰ってシャワーあびたぁーい！」
「洗濯するのも大変そうね、鈴付きの子達に今度何か買ってあげましょ」
「探窟中ってそこら辺どうしてるんだろうね。水浴びと水洗いしか出来なさそうだけど」
「帰ってから聞きゃーいーだろ」

ここから先は特に何事もなく、残り３０Ｍ近くの深度から来た道にそって1時間かけて戻り４人はオースへと帰ってきた。帰る道すがら途中に生っていたヘグイの実を齧りながら遺物鑑定所での清算を済ませ、寄り道をする事なくベルチェロ孤児院へ。着いた頃には空は赤く、齧っていたヘグイの実も芯だけになっていた。

孤児院の入り口には黒くて長い髪と白い奈落髪を織り交ぜて縦ロールにした髪型が特徴的な太い木の杖を付いた痩せぎすな女性が立っていた。ベルチェロ孤児院のベル

チェロ院長だ、赤笛や蒼笛等の低階級の生徒が合同探窟で多くアビスに向かうと、その日の夕方は入り口で生徒の帰りを待っている事が多い人だった。何年も鈴付きとして彼女の姿を見てきたアキにとっては厳しくはあるものの、律儀な良い人という印象が強い。ただ躾は本当に厳しく４人の中でティアレ以外は最低１回は裸吊りを経験している。

「院長、ただいま戻りました」
「随分と汚らしいじゃないか、星見の丘より下に潜ってやしないだろうね？」
「やだなぁ、今日は５０Ｍまでしか潜ってないですって。ただ分厚い壁を掘り抜くのに全員で協力してこの有様です」
「そうかい、なら上着は十分叩いてから入んな。中をあんまり汚すんじゃないよ」
「はーい、院長！」

入り口から少し離れて背のバッグを降ろしてバッサバッサと上着を大きく振る。上着から舞い上がる土埃は思っていた以上に多く、アキは目を細めケホリと小さく咳を零した。後は男女に分かれて交代でお互いのズボン等を手でバシバシ叩きあう。

「これでいーかいんちょー！」
「いいってさ。あー、ようやく休めるー！」
「アキー！　一緒にシャワー浴びにいきましょ！」
「今日は色々あり過ぎて流石にボクも疲れたよ……」

ラウルの声に院長が小さく頷き返したのを確認して、全員バッグを背負いなおして孤児院の中へと帰っていく。とある探窟家はオースに帰るかアビスに還るまでが探窟だと言った。ブラックジョークの類だが、ある意味本質を突いている。今回、彼等は全員揃ってオースに帰って来た。潜った深度は本当に大した深さではなく大した冒険もしていない。しかし探窟家としての一歩目を、奈落に続く一歩目を歩み始めた事に違いはない。

さぁ、闇へと続く長い長い旅を始めよう。

奈落に続く3歩目

「アキ……アキ、ごめん、ちょっと起きて……」
「むぐぅ～……さいなぁ。……まだ暗いのに何なのさぁ」

探窟から帰った夜、ドロテアに揺すられて起こされたアキは眠気でドヨンとした目を人が気持ちよく寝ている所を邪魔してきた不埒者に向ける。暗くて見え難いが、窓から入る月明かりで辛うじて見える分には何故か切羽詰まった表情をしている。

「ほんっとうにゴメン、お願いだから……トイレに付いてきてくれない？」
「……は？」

震えながら手を握って酷く小さな震えた声で言われた内容に、アキの寝ぼけた頭は理解が追いつかせることが出来ず、たった一言だけ絞り出すのが精いっぱいだった。

「つまり、とっても怖い夢を見て起きたけど、寝付けない。次第にトイレに行きたくなって、他の人に頼めないからすやすやしてた私に頼ってきたと」
「……はい」
「ドロテアちゃんさぁ、それはないんじゃないかい。トイレなら1人で行きなよ～、もう赤笛なんだよ～？　このかわいいやつめ～」

ドロテアが用を足し終えて部屋に帰るまでの暗い廊下でアキが一方的に肩を組んでドロテアの脇腹を指でツンツン突きまくる。熟睡してた所を起こされる恨みは一過性で長続きしないが深い。起こされて眠い目擦りながら手をつないでトイレまで着いていって、覚醒してきたアキは鬱憤晴らしを兼ねた全力のウザ絡みをしていた。恥ずかしさで顔を真っ赤にしているドロテアに液体生物のように絡みついていく、率直に言うとちょっとだけ怒っていた。

「とってもリアルな夢だったのよ、正直今でもはっきり思い出せるぐらいに」
「その怖い夢の内容ってなんなのさ～、えいえい」
「あたし以外が居なくなる夢、あたしだけ残される夢を見たのよ」

「なんとも抽象的だね？」
「最初は４人で夜の星見の丘で夜空を見てる夢だったわ」

　アビスの力場は中からも外からも観測を防ぐ。そのため、アビス内部からは光があっても太陽は見えず、夜に空を見上げても星や月が見える事はない。しかし、１層の星見の丘だけは例外だ。力場が濃い日でも深度１００Ｍまでであれば観測する事ができる。つまり星見の丘とはその名前の通り、アビスの中で唯一星を見る事ができる地点を指している。

「それでね、空には流れ星が流れてたのよ、それも中々消えないのが、まぁそこら辺は夢よね」
「確かそれであってる。流れ星かぁ、私は見た事が無いけど願い事が叶うらしいね？」
「そう！　だから皆で流れ星にお願い事したの。白笛になりたい!!　って」
「うんうん、私たちならそうするかもね」

　今のところ怖い要素は何もない、それどころか楽しそうな夢だった。話をせかそうとアキはまたドロテアの脇腹を指でつつく。

「お願い事をし終えた時には流れ星も無くなってたの、それで後ろを振り向いたら・・・」
「振り向いたら?」
「誰も居ないの、さっきまで皆と一緒にいて話もしてたのに。流れ星と一緒に消えちゃったみたいに」
「へーぇ?　それで終わり?」
「まだ続きがあるわ。もちろんあたしは一人だけ置いてった事に怒りながら皆を探すんだけど、何処にもいなくて……、何処に行っても元の場所に戻ってくるの」

面白くなってきたなとアキはうんうんと一人うなずいた。この手の話は聞いている分には楽しい話だ、自分で見たいとは全く思わないけど。

「でもその事を不思議には思わなかったわ。皆が居なくなったので頭がいっぱいだったから」
「それでそれで?」
「あたしはもう一度流れ星にお願い事をしようって思ったのよ。もう一度皆に会わせてって、でももう星が流れる事はなくて、ずっと一人で待ち続けてた。そこで目が覚め

たの」
「あんまり怖くなくなーい？」
「怖かったわ。もう一度目を閉じて開いた時には消えてるんじゃないかって」
「あ、そーいう話？　やだなぁ私はちゃんとここに居るよー？　消えたりなんかしないしない」

なるほど、トイレに入った時もちゃんとそこに居るか確認してきた訳だと納得する。その時に思ってた事は蓋をしておいた方が良さそうだ、誰もうわコイツ面倒臭いなとか思ってなかった、ヨシ！

「そうよね！　ならもう一つだけお願い！　今夜だけアキのベッドで一緒に寝て良いかしら？」
「う……ンンッ！　モチロンイイヨー」
「ありがとう！　ちょっと今日は一人で寝付けそうになくて……」

喜んでいるドロテアに対して、「いや、ソレ私が寝つけなくなりそうなんだけど」とはアキにはとても言う事ができなかった。結局部屋に帰った後もどうしても言い出せず、

アキは自分のベッドにドロテアを招き入れてしまった。誰かと一緒のベッドで寝るのは小さな鈴付の子を寝かしつけた時以来で久しぶりの事だった。

「ごめんね、何時か別の形で返すから……」
「期待しないで待ってるよ……」
「……手も握って良い？」
「好きにすれば……？」

小さいベッドに二人で寝て狭いわ、暑いわ、手を握られるわとアキは寝苦しさしか感じていなかったが、ドロテアにとってはそうではないらしい。とても安心している顔だった。

「おやすみぃ」
「はいはい、おやすみ……」

それにしても怖がりすぎだろうとアキは思ったが、夢の内容がドロテアの触ってはいけない古傷を抉ったのかもしれないとも考えられた。孤児院に居る生徒の中には何か

しら心に古傷を抱えている者は居る。アキもそうであれば、ドロテアも恐らくそう。ティアレも何か隠してるとアキは睨んでいる。

頭の中でぐるぐると取り留めもない考えが巡ってちっとも眠気が帰ってこないが、幾ら寝苦しくても眠らなければ明日のアキはきっと動く死体のような有様になるだろう。勤めて何も考えないように思考を停止して、ドロテアの体温で汗をかく程に暑くなってきたのを手と足を布団から出して無視しようと頑張って……アキがやっと眠れたのは外が俄かに明るくなり始めてからの事だった。

「……ねっむい」

窓からはサンサンと明るい陽の光と小鳥の鳴き声が、ドアや壁の向こうからは生徒達の元気の良い「おはよう」の声が聞こえる。朝からとても鬱陶しい事だとアキは眠気と苛立ちで座った目でそう思った。ついでに隣で涎をべっとり垂れ流しながら気持ちよさそうに寝てる子をどうしてくれようかとも悩んだ。

「朝だよドロテア、起きてよ」
「あともう少し……」

優しく揺すられるのを嫌がるようにドロテアは目の前のクッションに手を回して顔を埋めて逃げようとする。お腹にしがみ付かれる形になったアキは思わず笑顔になった。もう今日は全てを放り出してもう一度寝ても許されるような気さえする。その気持ちのまま、アキはドロテアを道連れにしてベッドからの身投げを慣行した。

数十分後、多少はストレスと眠気が晴れたのか幾分かスッキリした顔になったアキとそんな彼女を恨めしそうに見るドロテアが食堂で隣同士で朝食を食べていた。朝食の内容は炊いたご飯にスベラ（海苔モドキ）、棒ミソとマゴ芋で作った芋の味噌汁にゆで卵が一人一つ。だいたい何時もコレだ、偶に海草の味噌汁になるかマゴ芋の塩茹でになるかぐらいしか違いが無い。

過去最悪はベチョベチョの粥のような米に具なしの味噌汁、生茹で混じりのマゴ芋というふざけた内容だった。怒り狂った生徒達の手によって当番だった者達が揃って裸で吊るしあげられるという凄惨な事件を引き起こした孤児院の黒歴史になっている。

「もうちょっと優しく起こしてくれてもよかったじゃない」
「優しく起こしたよ、一回だけ。あ、塩取って？」
「はい。せめて2、3回粘るぐらいは……」
「次からはそうするよ」

ドロテアの愚痴を聞き流しながらアキは味噌汁とご飯に塩を振りかける。匙でかき混ぜてからズズリと啜って満足の出来る味になった事に満足気な息を漏らした。

「……その理解できないものを見るような目はやめてくれないかな？　私は原生生物じゃないよ」
「やっぱり味噌汁の追加トッピングに塩は無いと思うの。別に味が薄いって訳じゃないのに……」
「何年の付き合いだと思ってるのさ、いい加減慣れてよね」
「何度見てもなれそうにないわ。……まさか塩を食べる為に他の食べ物を一緒に食べてるんじゃないでしょうね？」
「ゆで卵は塩なしで食べてるんだけど？」

「それ何度きいてもほんと意味わかんない。普通ゆで卵にこそ塩振るでしょ？」
「振らない」

アキは昔からある意味で極度の偏食家だった。塩さえ入っていれば何だって食べるが、逆に塩が入ってない料理は口にしようとすらしない。ただ、話にある通りゆで卵等は塩なしでも口にする事がある為全く食べられないという訳ではない。アキの場合は、食べられないでなく徹頭徹尾えり好みして食べない。それが理由で食事を残す頻度が多かったアキに怒った院長が裸吊りにする等の罰を与えたが全く直る気配がなかった。最終的にあの院長を根負けさせて更生を諦めさせた筋金入りだ。食卓に塩の瓶が常に置かれるようになったのはアキの偏食のせいと孤児院では有名な話だった。

「ごちそうさまでした」
「ごちそうさまでした。ところで今日の授業は社会科だったかしら？」
「あー、そう。オースと他の国の関係性についての話だっけ。多分寝ちゃうと思うからメモよろしく、後で写すよ」
「今回は私のせいでもあるから別に良いけど、寝てるのバレたら最悪お仕置き部屋送りになるわよ」

「普段は優等生してるから大丈夫だよ、きっとね。それに昼からの依頼もあるし、少しでも体調整えておかないと」

大きく伸びをして欠伸を噛み殺す。周りの生徒達もちらほら食事の片づけを終えて教室へと向かったのか数が少なくなっていた。アキとドロテアも食器の後片付けを済ませて授業へ向かう。あらかじめ必要なものは食堂に来る前に袋に詰めて持ってきていた。

「昼からの配達依頼らしいわね。観光案内できるほどあたし達はオースに何があるか知らないから、暫くは配達させてオースの土地勘を付けさせるって言ってた」
「あれ？　そんなの言われてたっけ？」
「このあいだ先生から直接聞いたわ！」
「へー」

ドロテアは先輩や先生に気にいられているのか、こういう情報をいち早く仕入れている時がある。アキにはそういう事をされた経験は殆どない。前に愚痴ったらアキは受け身が過ぎるやら愛嬌や愛想がある方じゃないからではないかと酷い事を言われた。

アキはぐうの音も出なかった。それからは昨日の探窟の事や愚痴等の取り留めのない話をしているうちに教室に付いた。孤児院はそれほど広い訳ではない為、移動もすぐ済んでしまう。

「それじゃ、私は上の席で寝てるから後よろしく！」
「はいはい、おやすみ」

スルスルと縄梯子を上って自分の席へ登っていく。教室は余り広くない部屋で多くの生徒が入らなければならない為、壁に席と机が備え付けられている。アキの席は一番上で天井に触れるほど高い位置にある。目と耳、そして成績が良い生徒ほど上の席に座る事になる。つまりアキは授業を受けている年の近い赤笛、鈴付き達の中でもトップクラスの評価を貰っているということだ。アキが縄梯子を登りきった先、自分の席の隣には既にフィジカルエリート（ティア）の権化（レ）が座っていた。

「おはよう、はやいね？　それじゃおやすみ」
「おは……なんて??」
「昨日の夜全然眠れなかったんだー。お願いだからこのまま寝かせてー」

「いや、これからじゅ……アキ？　アキ??　もう寝てる……えっ？　嘘でしょ……??」

ティアレが聞き返した時には、アキは背筋をピンと伸ばして、頭を壁に預けて綺麗に座った姿勢を維持しながら既に眠りにおちていた。ティアレに出来た事は自分と反対側の縄梯子の方に落ちないか心配しながら授業を受ける事ぐらいだった。

「アキ。アキ。そろそろ起きなよ、授業終わったよ？」
「……うん。んん、んぅ～～～～っ、ふぅ。おはよ～。んー、頭スッキリしたぁ」
「バレないものなんだねぇ……先生も下から此処は見えないんだ」
「そりゃあ此処は一番上だもん」

教室は四階建ての建物を一階から最上階までの空間を一つの部屋に収めた非常に天井が高い部屋だ。黒板から見上げるとなれば角度がきつく距離もあるため表情までは読み取られない。だから安心して寝れる訳だが、席に囲いがあるという訳ではないため横に落ちたらそのまま下まで落ちる危険はある、最悪死ぬ。

「アキー、起きてるー？」
「あ、ドロテアおはよう」
「よいしょっと、おはよう」
「あれ？　ラウルは??」
「ラウルなら授業中に寝てるのがバレてお仕置き部屋に連行されていったわ」
「座学の成績低いから目を付けられてるのに良くやるよ……」
「でもそこがラウルらしいって感じがしない？」
「わかるー。あ、そうそう。これから依頼があるか見に行くつもりなんだけど二人とも一緒に行かない？」
「いいよー」
「それじゃあ降りようか」

床まで降りた三人は孤児院の掲示板へと向かう。名指しの依頼であれば教室の入り口に張り出されるが、今の三人には縁のない話だ。細々とした内容の依頼は別の場所に纏めて張り出されている。今向かっている場所がソレだ。

「来たか、これが今日オレ達に割り振られた依頼の内容だ。目を通しておけ」
「あ、ジルオ先輩だわ！」
「お疲れ様です。えーっと、なになに？」
「オレ達って事は……今日はジルオ先輩と一緒に依頼をするって事ですか……？」
「あぁ、よろしく頼む。空のバッグと念のためロープとハーケンを幾つか、後は水筒を持参して探窟服に着替えて孤児院前に集合しておいてくれ」
「重装備ですね……」

会話が続いている中でアキは渡された依頼書の内容に目を通していく。依頼主はキャラバン船の商人から、届け先はラフィーさんの香辛料店。此処までは問題はなかった。問題があるのは……

「いや、量」
「そんなに多いの？」
「うん、運ぶなら四～五人は欲しいかな……？」
「それで港から運搬……？　あそこ滅茶苦茶道が険しいんだよなぁ……」
「ティアレは通った事あるの？」

「幼い頃一回だけね。ボクは島の外出身だから」

アレコレと話している内にいつの間にかジルオ先輩の姿が消えていた。恐らく依頼の準備をしに行ったのだろう。三人も慌てて装備を整えに自室へと戻っていく。そして集合場所に三人が集まった時には既にジルオ先輩は待機していた。

「思っていたより早かったな。それでは出発だ、準備は良いな?」
「はーい」
「あ、港に行く間、殲滅卿のお話聞いても良いですか!」
「ダメだ」
「この間も断られてたのにドロテアも懲りないなぁ……。ボクも大丈夫です」

ガーン、とでも音が鳴ってそうなドロテアを放置して孤児院を出発する。何時もの光景過ぎて誰も気にする者は此処には居なかった。ジルオ先輩もドロテアに悪意がなく引き際を弁えている事が解っているからか特に気にしている様子もない、慣れたとも言う。数秒後、走って追いついてきたドロテアがアキにじゃれついてきゃあきゃあと黄色い声を上げ始めたのに対して、男子二人は配達依頼とはいえ緊張感も何もないなと揃っ

てため息を吐いた。